

言語学者有坂秀世の生涯

慶谷 壽信

一時間ほどで生涯を語ることはむづかしい。

旧称国語学会は、昭和55年9月に『国語学大辞典』（東京堂出版）を刊行。このほど、その後身たる日本語学会が『日本語学大辞典』（東京堂出版）を計画。「有坂秀世」項目（一、二〇〇字）を依頼され、原稿を執筆、提出した。

一、二〇〇字の中に業績を含めた生涯を描かねばならぬ。それをもとにして、どのように話すかを考えた。

例案案内では、「有坂秀世博士についてどのようなきっかけで興味を持たれ」たのか、言及しなければならぬことになっていく。

具体的なきっかけは、『トンシユエ』第五号（同学社、平成五年二月）の「有坂秀世博士のこと」に記してある。昭和55年中

国語学会第30回大会のシンポジウム「中国語音韻史研究の現状と問題点」で「前史―石塚龍磨から有坂秀世まで―」という報告をおこなった。このとき、『上代音韻攷』の成書年代が問題となつた。成書年代としては、一応、河野六郎説があつたけれども、このさい、詳しい闘病の軌跡を追い求める必要を感じたからである。

有坂秀世は、明治四十一年（一九〇九）九月五日、沼藏、敏子の五男として、広島県呉市大字^{しやう}山田村字三番町二丁目七十三番地に生まれた。この番地は、有坂氏自身も知らなかった可能性があるが、『學士會月報』にみえる父、沼藏の現住所、また『水交社々員名簿』にみえる現住所によつて推測した。

呉は、明治二十二年七月一日、呉鎮守府が開庁されてより、軍港として早くから欧風の町づくりを企図した。特にその中心地に

対して、何番町、何丁目、何番地という整然とした住居表示を探用した。

有坂氏の戸籍抄本（大正大学蔵）に「廣島縣吳市番地不詳ニ於テ出生」と書かれているのは、あるいは軍港であることが考慮されているのかもしれない。

秀世出生時、父^{註⑤}鋳藏は、海軍造兵中監（海軍中佐相当の技術科士官）として呉海軍工廠造兵部長心得の職にあり、東京帝国大学工科大学教授を兼任し、造兵学第二講座を分担していた。これより先、明治十七年三月二日、東京大学予備門二年生（十六歳）のとき、向ヶ岡貝塚で^{註⑥}弥生式土器を発見。明治二十三年七月、帝国大学工科大学造兵学科を卒業して、直ちに仏国留学三年。帰国して明治二十六年十二月、海軍小技士（少尉相当官）に任じられた。明治二十九年二月五日、呉仮設兵器製造所製造主幹に補せられた。同三十年五月二十五日、呉第一号十二センチ砲を作る。直径十二センチの小さな大砲であるが、これが海軍国産砲の嚆矢である。東京帝国大学工科大学教授を兼任したのは、明治三十五年二月六日、造兵大技士（大尉相当官）のとき、三十四歳であった。明治三十五年十一月二十五日、工学博士^{註⑦}の学位を受く。

ついでまでながら、鋳藏氏が工科大学教授を兼任したころ、世

の中にどのような動きがあったかのみをみてみよう。

明治三十五年二月二十六日 敘勲二等授旭日重光章 陸軍少將正五位勲四等 有坂成章

刻苦多年明治三十一年式速射野山砲ヲ創製シ陸軍ニ裨益ヲ與フルコト尠カラス其功績顯著ナリトス依テ勲二等旭日重光章及金五千圓ヲ授ケ賜フ

（明治三十五年二月二十七日『官報』第五五九二號）

この「明治三十一年式速射野山砲」こそが日露戦争で用いられた、世に有名な「アリサカ砲」であつて、金田一春彦氏が呉市でおこなつた講演^{註⑧}で、有坂秀世を「アリサカ砲」の創始者の五男としているのは誤りである。海軍では大砲に個人名を冠する習慣はなかつた。海軍技術大佐、同少將級に対する問いあわせの結果である。^{註⑨}ただし、有坂鋳藏を呉に呼び、後に呉海軍工廠長となつた山内萬壽治中将に山内速射砲がある。

ところで、帝国大学教授兼任は、一般にほぼ（技術科）大尉相当官のころ。海軍に適当な人がいないばあいは、陸軍の間が担当した。

明治二十年八月十一日、参謀本部陸軍第一局課員兼陸軍大学校教授陸軍砲兵大尉天野富太郎教授に任せられ、造兵学及

火薬学授業を担任す。〔東京帝国大学五十年史（上册）〕pp.

一一二六—一一二六七

天野富太郎教授の発令は、いやも応もなかった。有坂鋁藏氏が帝國大学工科大学長古市公威氏のすすめにより、新設学科の造兵学科に入学し、海軍技術学生となることがわかっていたからである。

この天野富太郎が鋁藏氏の指導教授であった。テキストはフランス語のものを用いた。二年生のとき、天野富太郎は大阪の陸軍砲兵工廠の検査官に転じ、鋁藏氏も大阪に移り、砲兵工廠で二年間実地教育を受けた。

さて、有坂一家は、明治四十四年一月、東京に移る。

大正四年四月八日、学習院初等学科（註）に入学。

金田一京助「有坂博士の想い出」『国語学』第十輯、昭和二十七年九月）によれば、

有坂愛彦（註）さんは、秀世さんの令兄であられる。ついて幼時の思い出を伺うと、秀世さんは六才の頃から、おとぎ話を創作

して半紙を二つ折にしたものへいっぱい書いておられたそうである。が、学習院の小学一年へ上った頃には、なにか、ぼんやりとしていて、授業のベルが鳴っても、ひとり花園にのこっていたりなどして、先生がそれを探しに教場から出て

来てやっと見つけて連れて戻られたことなどもあったと言うことで、母堂が、先生から、「どうも秀世さんは低能児ではないでしょうが、少しぼうツとしています」と注意されたものだったそう。令兄は、「低能児」の一語を特に高笑されながら話された。（p.84）

注意されて学校からもどってきた母は、家族の前で笑いながら報告した。深刻な顔をして、息子に注意したりはしなかった。この子の性格はよく心得ていたし、学力の点では、すでに入学前からおとぎ話も作っていたのである。心配することは、全くなかった。

金田一氏はこのことについて

多分、一年生の時は、もう三年生ぐらいに、読めもし、書けもして、みんなといっしょに先生が教えて下さることとは、あんまりつまらなくて、だまっていっしょに聞いておれなかったせいであつたかと思われる。（同上、p.84）

そういうこともあつたであろうが、運動神経がにぶければ、ウスノロにみられることもある。

初等学科一年級南組の学級主管は三宅右祐助教授であつた。い

ま思い出して、この三宅先生をなんとかさがし出して、感想を聞いてみたかっと思う。当時でも相当な年輩で、困難なことであるうとは考えていたが、私が手抜きしたことの一つである。

低能児云々のことで、前に引いた金田一氏の文章に、つぎの箇所がつづく。

それが四年になられ、たまたま巖父の有坂紹藏^{ソウザウ}博士が、保護者会にはじめて出席された日に、受持の先生から、「秀世さんは優に中学二年の実力がありますよ」と告げられて、喜んでお戻りになったという。(p.84)

学習院時代のことで、もう一つふれておきたいことがある。

三兄磐雄氏が東京府立一中在学中のときのことである。理科系の人であった磐雄氏は、歴史という学科があまり得意ではなかったらしい。そこで試験前に秀世氏が二、三日間、兄を前にして歴史の特訓をおこなった。歴史は、日本史であつたらしい。書物、ノートを使わずに、全時代を口述した。これは、磐雄氏の海軍兵学校受験のときのことであつたとも、府立一中の学期末テストのときのことであつたともいう。磐雄氏は、大正九年八月、府立一中四年修了で兵学校に入った。海兵第五十一期生徒である。兵学校受験のときとすれば、秀世氏は学習院初等学科六年生になつた

ばかり。小学五年生とほぼ同じである。府立一中の期末試験のときとすれば、五年生以下になる。つまるところ、小学校五年生以下であるといつてよい。今日に置き換えてみれば(五学年の違いがあるから)、大学受験生を中学一年生が特訓したことになる。磐雄氏とて並の人ではない。弟の実力を率直に認めていればこそ、この才氣煥発の人が特訓に従つたのである。得意科目ではあつたらうが、有坂家が考古学や歴史の雰囲気に含まれていた、その家庭環境によることが大きかつたのである。

学習院初等学科を卒業して、大正十年四月、東京府立一中に入った。入試倍率は八・四であつた。

府立一中時代に特筆すべきは、親しい友人があらわれたことである。名古屋大学名誉教授であつた故重松鷹泰氏である。学生時代から、私は重松氏の名を知っていた。教職科目として教育原理、教育心理、青年心理をとつたが、その中に重松氏の名はなかつた。教育学部の専門科目担当だったのであろう。

通学中の二人の話題は、和漢の古典にみえる聖賢の教えと音声学であつた。有坂氏は、発音のことを懇切にくりかえし説明したが、いつも理解できるとは限らない。重松氏は根負けして、わかつた顔をしてやりすごすこともあつた。

私は学生のとぎ、金田一春彦先生の国語教科教育法の単位を

とった。金田一先生は、教育学部の専任教官で、文学部併任であった。このころ、金田一、重松両氏は同じ学部の教官であり、同じ教授会（あるいは教官会議）に出席していたが、金田一氏は重松氏が有坂氏の親友であったこと、重松氏は金田一氏父子が有坂氏と親密な関係にあることを知らなかったため、有坂氏について話したことはない。もし話すことがあれば、多くのことが明らかになっていただであろうに、と残念に思う。

府立一中四年修了で、大正十四年四月に第一高等学校に入学した。文科乙類（ドイツ語を第一外国語とする者）三十五名中の二十一番であった（大正十四年四月十四日の『官報』第二七九〇号）。

文科甲類一二〇名中の一番は、後に同じ言語学科で学ぶことになる、三重県津中学四年修了の服部四郎氏であった。金田一京助氏は、「服部君は……一高は一番ではいって一番で出た秀才ということ、言語学科を重からしめた存在であった。」（『有坂博士の想い出』p. 83）と書いているが、文甲卒業の一番は、私の学生時代に『六法全書』に名前のみえた石井照久氏（東京府立一中卒）である。文乙では、一番橋本文夫（後にドイツ文学専攻、中央大学教授）、二番有坂秀世であった（昭和三年四月十九日『官報』

第三九〇号）。

なお、大正十四年に一高に入学し、有坂氏と多少とも交渉があったと思われる者若干名を示す。文甲、服部四郎、古屋亨（東京府立一中四修）、松尾聰（東京府立一中卒）、石井照久（東京府立一中卒）、文乙に下田弘（東京高師附属中四修）、松浦亨二（富田中四修、昭和二年九月歿）、文丙（フランス語を第一外国語とする）に下田武三（東京高師附属中卒、下田弘の兄）、理甲に切替一郎（東京府立一中四修）、山崎不二夫（学習院中等科四修）、理乙に川喜田愛郎（東京府立一中四修）、重松鷹泰（東京府立一中四修）、藤田良雄（福井中学四修）等。

有坂氏と同じく学習院初等学科を卒業した山崎不二夫氏（受験参考書『新々英文解釈研究』等の著者山崎貞氏二男）は、学習院中等科四年修了で一高理科甲類に入学して、東寮第五番室で有坂氏と同室になった。『研究生活四十年―農地工学確立への道―』（山崎不二夫先生の古稀を祝う会、昭和五十四年二月）に書いている（pp. 54・55）。

一高は全寮制度で、新生入生は理科の生徒も文科の生徒も一〇人前後がコミで同室にはいり、一年間一緒に生活する。有坂秀世、藤田良雄の両君はこの同室者だった。有坂君と私は小

学校が一緒で、彼は府立一中へ、私は学習院中等科へ進み、一高の寮でくしくも同室になった。藤田君は福井中学の出身だった。同室者の個性は多様だったが、大部分はそれぞれのやり方で青春を謳歌していた。その中で、有坂、藤田両君だけは全くちがっていた。毎日朝は必ず五時に起きて本を読む。授業がすむとすぐ図書館へ行き、夕食後も閉館註になるまで勉強する。このような生活を嘲笑するものもいたが、両君のこの日課はけつして変らなかつた。今にして思えば有坂君は言語学の研究を、藤田君は天文学の研究をすでに一生の仕事と思い定めていたにちがいない。

藤田良雄氏は後に東大理学部教授となり、昭和三十年五月十二日「低温度星の分光学的研究」によつて恩賜賞を授けられている。昨年七月二十二日の皆既日蝕を小笠原方面、硫黄島近くで観測して、多摩市の百歳の人として報道された。そもそも『有坂秀世研究—人と学問—』は、「あとがき」にも記したように、有坂秀世生誕一百一年記念、藤田良雄生誕一百一年（生存）記念なのである。

金田一京助氏の「有坂博士の想い出」には「大学を卒業して、大学院に入つて勉強されているうちに、一度、高等学校時代にか

かられた胸の病が再発して、……」（p.85）とあつて、一高のときに結核になつたことを記しているが、それが何年のときのことであるか、はつきりしなかつた。二、三のことから、私は、とりあえずこれが二年生の二期期のことであると推論していた。

思いがけず、東大教養学部に残されている有坂氏の記録—学籍簿をみることでできて、この問題に決着をつけることができた。二年二期期、授業日数64、欠席日数47。授業日数64は、期末試験日を含まない純粹の授業日数である。軽度の結核なら、夏休み約二ヶ月中によくなることもあるが、二年二期期欠席日数47のうちに位置づけるのが最も穩当である。

二年の二期期に結核、同三期期に神経衰弱の二つの病氣を経験したが、三年の十月半ばから三月十九日までかかつて『語勢沿革研究』ノート4冊註を執筆する。「ふね」、「ふなびと」、「あめ」、「あまがさ」のような対にあらわれる母音の変化とアクセントとの間に関係がありはしないか。それによつて上代のアクセントを復原できないかと考えた。アクセントの点は成功しなかつたが、weak grade→strong gradeの点から「vowel-gradationノ法則」に進んだ。この「vowel-gradationノ法則」は欠点のあるものであつたが、

大学三年間の研鑽を経て、大学卒業直後（昭和六年五月）に書い

た「國語にあらはれる一種の母音交替について」『音聲の研究第IV輯』、昭和六年十二月に結実した。これは有坂秀世のデビュー作であると同時に、生涯を通じての最高傑作であった。

大学卒業のことについて一言しておく、昭和六年三月三十一日、東京帝国大学文学部言語学科を卒業した。言語学科六名の卒業生中には池田徳眞、大嶋功、服部四郎の三氏が含まれている。

昭和廿六年七月五日付の「見舞金趣意書」中に発起人としてこの三氏の名がみえる。そのうち、池田徳眞氏は学習院初等学科の四年先輩であった。

『音聲の研究第IV輯』には「音聲の認識について」も載せられている。「音聲の認識について」も、大学卒業直後のこの時期に書かれたと思われる。「音聲の認識について」は、有坂氏の音韻論分野における最初の著作であった。この二つの論文がともに『音聲の研究第IV輯』に掲載されたことは、まことに意義深いことであつた。

このときの無理がたつてか、結核が再発し、八月二十四日には、神奈川県鎌倉郡腰越町にある鈴木療養所に入所する。昭和七年七月十日に退所し、昭和八年七月一日に再入所、昭和十年十月末退所。これは鈴木病院に残されている記録その他を参考にした

ものである。

再入所後の昭和八年後半に『上代音韻攷』の「第三部 奈良朝時代に於ける國語の音韻組織について」の原稿のほとんど二、〇〇〇枚（二百字詰）を書きあげる。

この間に重要な論文も発表された。「古事記に於けるその假名の用法について」『國語と國文學』昭和七年十一月、「古代日本語に於ける音節結合の法則」『國語と國文學』昭和九年一月は、「國語にあらはれる一種の母音交替について」を發展させたもので、古代日本語にも母音調和（あるいは、母音諧調とも）の名残ともいふべき段階が存在したことを明らかにした。

一方、音韻論関係の研究は、「音聲の認識について」にはじまり、「音韻に関する卑見」『音聲學協會會報』昭和十年一月、「音韻に関する卑見」中の用語の訂正『同』、昭和十年五月、「音韻變化について（一）〜（七）」『コトバ』、昭和十年十一月〜昭和十一年五月、「音韻論」『音聲の研究第VI輯』、昭和十二年一月）などを経て、著書『音韻論』となった。これを学位請求論文として、参考論文「アクセントの型の本質について」『言語研究』昭和十六年四月、抜刷を添えて昭和十六年七月八日に東京帝国大学文学部に提出。昭和十八年二月二十四日の文学部教授会でパス、

五月六日付で文学博士の学位を授与された。

漢字音の研究は、万葉仮名の音価を決定せんがために早くからみられ、いわゆる重紐論（有坂の用語では、「拗音説」）は、すでに『上代音韻攷』にみえる。「萬葉假名雜考」（『國語研究』昭和十年七月）、漢字の朝鮮音について（下）（『方言』昭和十一年五月）を経て、「カールグレン氏の拗音説を評す（二）」（『四』）（『音聲學協會會報』昭和十二年十一月、昭和十三年三月、七月、昭和十四年七月）において専論された。「拗音説を評す（四）」において四等專屬韻直音説を提出したが、そのため論旨が一貫しなくなり、その部分は、論文集『國語音韻史の研究』（明世堂、昭和十九年七月）において修正されている。中古中国語音に「（前舌的）、」の二種の介音を認める不朽の卓説であった。

『國語音韻史の研究』に対して、日本学士院は、昭和二十七年二月十二日の總會において、学士院賞を授与することに決定したが、残念ながら、同年五月十二日の授賞式を待たずに、三月十三日に逝去した。東京都文京区白山の浄土宗・浄雲院心光寺に眠る。

有坂愛彦先生夫人富子氏の十三回忌を前にして、

七月二十五日（日）、書き終る。

注

① 水交社は、海軍士官の親睦団体で、兵科、技術科の別なく、現役、予備役、後備役、退役のすべてを含む。

② 明治十五年に横須賀鎮守府、明治二十二年に呉鎮守府、佐世保鎮守府、明治三十年に舞鶴要港部ができた。明治三十五年五月に、舞鶴要港部は舞鶴鎮守府に昇格し、ここに横鎮、呉鎮、佐鎮、舞鎮の四鎮がそろうことになる。

③ 父のことについて少し詳しくのべるのは、有坂秀世を理解するには、その父韶藏、その母敏子、兄達のことを知らねばならないと考えるからである。

④ 技術科は兵科に対していう。兵科とは、軍隊を動かす権限、つまり、軍令大権をもつものをいう。

技術科は、普通、つぎの五つをいう。
機関科、軍医科、主計科、造船科、造兵科。

機関科は金焚きである。海軍軍医の中には陸軍軍医総監森林太郎ほどの有名な人がいないが、有坂氏との関係で、鈴木療養所を開設した鈴木孝之助海軍軍医総監が知られることになってくれればよいと思う。

主計科は、予算をあつかうが、下つ端は飯焚きである。『海軍め

したき物語』(高橋孟著、新潮社) という本がある。造船科は船を作るもの。造兵科は兵器を作るものであるが、まず必要とされたものは、軍艦の大砲であつた。

⑤ 鋸藏氏は、十二、三歳のころから、兄の季三氏と郊外の遺跡めぐりをして、古物を採集していた。このとき、大学にも古物採集をしている坪井正五郎、白井光太郎両氏がいるということ、義兄の石川千代松氏につれられて、東京大学の寮に坪井、白井両氏をたずねた。翌日、つれだつて向ヶ岡の貝塚にいったところ、この土器を発見したのである。偶然のようにみえるが、鋸藏氏は前年に向ヶ岡貝塚を発見して、いろいろなものを探集していた。

⑥ 学位論文審査ノ要旨

一、新案速射砲

本論ハ海軍用トシテ現今世界ニ専ラ行ハル、所ノ「ホッチキス」式「ノルデン」式等ノ速射砲ヨリモ更ニ優等ナル一種ノ新式速射砲ヲ案出シテ之カ実験ト理論ヲ記述シタルモノナリ而シテ其考案ノ主要ナル点ハ尾栓開閉機ヲ簡実ニ且ツ強固ニ構造シテ其開閉運動ヲ單純ニ且ツ迅速ナラシメルタメニアリコノ結果ヲ得ンガ為メ一種ノ円錐形ナル「ネヂ」ヲ用井テ尚之ニ新案ノ構造

ヲ施シタルハ砲弾発射ノ數ヲ増加シ砲身ノ重量ヲ減少シ其抵抗カヲ強クシ砲弾經過ノ距離ヲ長クシ砲弾ノ速度ヲ速クシ全部ノ震動ヲ少クスルコト等著大ナル功績ヲ見ルヲ得タリ

右論文ノ外ニ著者ハ自働発射教指示器ト云フ者ヲ案出シテ之ヲ記述セル一篇ヲ提出セリ此考案ハ大小砲発放ノ數ヲ速知センカ為メ砲身退却ノ運動ヲ利用シ之ニ計數器ヲ応用シタル者ニシテ戦鬪及ヒ平時射撃ノ際ニ在リテ有益ナルモノトス

以上ノ事項ニ拠リ著者ハ工学博士ノ資格アルモノト認定ス
(明治三十五年十一月二十六日『官報』第五八二〇号)

後半部分の「自働発射教指示器」なるものは、技術者としての有坂鋸藏氏の腕のみせどころ。かつてはテーブルコーダーにテーパー・カウンターというものがついていた。大砲のテーパー・カウンターというところか。

⑦ 「呉市が生んだ二人の天才―有坂秀世と藤井清水―」、昭和五十四年十二月十一日、於呉市民会館。

⑧ 昭和五十七年四月十七日、都立大学方言学会における発表、「大正大学の有坂秀世講師」において、金田一先生の前で詳しく説明した。

⑨ 後に初等科と改称されるが、このころは初等学科であつた。

学習院の一年生でも、生徒や児童などではなく、一人前の「学生」であった。先生も教諭ではなく、教授か助教授であった。

⑩ 四兄、愛彦、よしひこと読む。愛彦氏は、NHKラジオ放送の土曜コンサートを担当して、軽妙な名曲解説で人気があった。

人々は「ナルさん」と呼び、「ラウさん」と呼んだ。私が有坂兄弟について書いたものを読んで、中国語学会の先輩、故松本一男氏は、「なんだ。有坂秀世はラウさんの弟か。」といった。

⑪ 閉館後は寮にもどって勉強する。藤田氏によれば、有坂氏は「十時きっかり」にやめたが、藤田氏も「十時きっかり」にやめたのだと思う。

⑫ ノートは歿後発見されて、『語勢沿革研究』（三省堂、昭和三十九年十一月）として刊行された。

⑬ 有坂愛彦、慶谷壽信編『有坂秀世 言語学 著述拾遺』
三省堂、平成元年六月 pp.361-362所収。

⑭ 岡山の池田氏一族で、華族であった。

⑮ 歿後に発見されて、昭和三十年七月に三省堂より刊行。成書時期は、昭和七、八年ごろとされる。

⑯ これが大学卒業論文の題目である。

⑰ 戸川芳郎東大文学部長の調査で判明。

後記

本稿は、平成二十二年六月二十六日土曜日午後一時より、名古屋大学文学部大会議室にて開催された名古屋大学中国語学文学會第十九回例会において、

東京都立大学名誉教授慶谷壽信先生にご講演頂きました『言語学者有坂秀世の生涯』の内容を、慶谷先生自ら原稿を起しし注釈をつける労をとって下さり、ここに講演の記録として掲載するものです。先生は、水谷真成先生おゆずり本ともいふべき遺品の原稿用紙に玉稿を手ずからしたためられました。

昭和三十四年三月名古屋大学文学部中国文学専攻を卒業、のち、昭和三十九年四月より四十三年二月まで同中国文学の助手を務められ、昭和四十三年三月に東京都立大学に赴任された後も、昭和五十二年四月から五十四年三月まで名古屋大学文学部非常勤講師として集中講義を担当されました。

昭和五十二年度の講義題目は「仏教文化と中国語学」、昭和五十三年度の講義題目は「中古音概説」でした。先生は、昭和五十六年十一月、『中国語学』第二二八号に「前史―石塚龍磨から有坂秀世まで―」を発表されてより以来、有坂博士の人と学問について緻密なる論考を発表し続け、平成二十一年九月五日、『有坂秀世研究―人と学問―』を刊行されました。学生時代から音韻学者としてのお仕事に私淑申し上げ、先生のお話を伺うことのできる機会を切望しておりました。ついに念願叶いご講演頂くことができ、玉稿を賜り論集

に掲載することができましたことを深く感謝申し上げます。（田村加代子）